Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU　Autumn/Winter 2020

写真は、いずれも 2020 年 4 月～ 11 月に観光学部 HP に掲載したニュース記事より

Contents　－目次－

1. Reports　－和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告－
2. Topics　－過去のイベントとニュース－
3. Future Events　－今後のイベント紹介－

■ 地域インターンシッププログラム Local Internship Program（LIP）

「紀の川スイーツの開発」（和歌山県紀の川市）

藤谷　夏帆さん（13 期生／広島県立安古市高等学校出身）

私たちは、紀の川市を拠点に“売れる”スイーツ開発を行っています。カフェのオーナー様に協力していただき、これまでパフェやランチプレートのデザート、アイスクリームなどを開発してきました。どの商品もご好評いただき、とてもやりがいのある内容になっています。

紀の川 LIP の目的は、長期的な目線で街を考えることであり、メインターゲットは主婦層です。高齢化が進む街で子育て世代が求めていること、また、お母さんが住みたいと思う街はどんな街かということを考え、主婦の団欒の場所になることを目指しカフェでの取り組みを行っています。私たちの活動はすぐに結果がみえることではなく、取り組みの効果と街の人口増加との因果関係もはっきりとは分かりませんが、話題性のある取り組みで少しでも紀の川市に貢献できればと思っています。

この目的を果たすため重要となるのが、“売れる”ということです。ターゲットである主婦に選ばれるスイーツでなければなりません。そのために私たちが大切にしていることが、調査と分析です。アンケート調査をもとに SPSS という分析ソフトを使用し、どんな商品が売れるのかということを緻密に考え、スイーツを提案するようにしています。商品開発のための勉強会なども行い、勉強したことを実践できる非常に充実した環境は、紀の川 LIP の特徴でもあり一番の強みでもあります。

今年度は、藤桃庵様にご協力いただき、アイスクリームの開発を行いました。フレーバーやパッケージデザインについて、大学生協本部よりいただいた資料やアンケート調査の分析結果をもとに『キルシュ香るホワイトチョコとバニラ苺』というアイスが完成しました。今年は、新型コロナウイルスの影響による大幅な予定変更とはじめてのオンライン会議にかなり戸惑いました。まずはアイスクリームについて勉強するところから始まり、調査分析、フレーバーの組み合わせの研究、試食、パッケージ制作と、ほぼすべてオンライン上で行い、半年以上にわたるプロジェクトとなりましたが、藤桃庵の皆様の温かいご支援を受けつつ、無事発売することができました。和歌山大学、和歌山県立医科大学、とれとれ市場などで販売されているので、ぜひ手にとって頂きたいです。

紀の川 LIP では、こうした取り組みの中で、自分たちの能力を向上させつつ、紀の川市の未来に貢献できるよう活動しています。これからも勉強に励み、よりよい商品開発を目指します。

■ プロジェクト自主演習

「「和大生 × 中紀バス」旅行商品企画からツーリズム・サプライチェーン・マネジメントを体験的に学ぶ」

山本　茜さん（11 期生／大阪府立住吉高等学校出身）

立花　浩暉 さん（12 期生／大手前高松高等学校（香川県）出身）

入江　詩織さん（12 期生／兵庫県立尼崎小田高等学校出身）

私たちは、和歌山を中心に貸切バスやバスツアーを提供している「中紀バス株式会社（以下、中紀バス）」にご協力いただき、実際に旅行商品の企画、販売を行わせていただきました。ただ旅行商品を企画するのではなく、商品に関わる企業や業者を含めたツーリズムサプライチェーンを理解し、ビジネスとして成立するという点を意識して活動を行いました。活動が始まった、2020 年 4 月は緊急事態宣言が発令された時期でもあり、混乱もありました。しかし、この時期だからこそコロナウイルスへの対策や、和歌山県・国が行う観光促進キャンペーンの活用を、旅行商品を提供する側の視点で考えることができ、大変貴重な経験となりました。私たちが企画したツアーの中で、実際に 3 つのツアーが催行されました。この混乱の中で、真摯にご指導いただいた、中紀バス中西様に感謝いたします。（山本茜）

私は将来、就職先で旅行ツアーを企画する部署に所属したいと思っていたので、そこで必要なノウハウを学ぼうと思い今回のプロジェクト自主演習に参加しました。

私が企画したツアーは 3 つの内 2 つが催行されました。催行されたうちの 1 つ「わかやまの海と山の魅力を感じる周遊ツアー」は自信作でした。このツアーは和歌山県に初めて訪れる方をターゲッ

トとして企画しました。目的地としては和歌山県全体を設定し、1泊2日の短い時間でわか山の魅力を感じる周遊ツアー」は自信作でした。このツアーは和歌山県に初めて訪れる方をターゲットとして企画しました。目的地としては和歌山県全体を設定し、1泊2日の短い時間でわかやまの魅力を感じてもらうアクティビティを多く取り入れました。ツアー内容の目玉であったウユニ塩湖を観察できなかったという事でその点は残念でしたが、他の内容は問題なく催行することができ、お客様も大変満足されていたという事なので自信になりました。

今後は企画したツアーが全て催行されるよう、今回学んだ事を活かしツアー内容を考えたいと思います。（立花浩暉）

今回の活動では、ツアー企画における実践的な力と考え方が身に付きました。私は旅行販売を企画するのは今回が初めてでした。ただツアーの内容を考えるだけでなく、原価計算や中紀バスとの話し合いを重ねることで作っていきました。今回の活動で感じたことは、お金のことを考えつつも、楽しいツアーを体験してほしいことの両立の難しさでした。価格が高ければ良いものはできますが、高すぎても購入されません。費用を抑えつつ、何をツアーに入れるかはとても悩みどころでした。

今後はツアーにおいて何を優先させるか、収益を確保しつつもお金をどのように削るかを重視しながら作っていきたいと思います。また、前期はできなかった乗務員体験による現場確認をし、企画の改善を図ることでツアー企画における必要な視点を学びたいと思います。（入江詩織）

■「放射線と社会：福島飯舘村研修」（福島県相馬郡飯舘村）
山岸　大二郎さん（10期生／石川県立金沢商業高等学校出身）

2020年8月29日から9月3日にかけて、「放射線と社会：福島飯舘村研修」に参加しました。この研修は大阪大学核物理研究センター主催で行われ、大阪大学、岐阜大学、尚絅学院大学、和歌山大学の4大学の学生らが参加し、合同で実施されました。新型コロナウイルスの拡大により、フィールドワークのみならず、対面での会話が難しい状況が続く中、私にとって今年度初のフィールドワークとなりました。

研修の殆どが福島県浜通りに位置する福島県相馬郡飯舘村を中心に行われました。飯舘村について、多くの人は聞き覚えがあるのではないかと思います。飯舘村は、東京電力福島第一原発事故の発生により、全村非難となり、一時は人が生活することのできない村となりました。その後、2017年に村の大部分の避難指示が解除され、村民の帰村に向けた新しい村づくりが、村長らを中心に進められています。

この5日間の研修では、飯舘村での土や草、水などのサンプル採取とそれらの放射線量の測定、東京第一原子力発電所への見学、山津見神社訪問や村長らとの談話、また、放射線に関連する講義とフリーテーマでのグループディスカッションなどが行われました。異なる専門分野を学ぶ他大学の学生とのグループディスカッションでは、これまで自分が考えることのなかった視点からの意見もあり、自分自身の価値観や考え方を広げることにつながりました。

また、研修期間中は、私にとって普段聞きなれない単語が多く出現しました。例えば、「セシウム137」「セシウム134」「半減期」「マイクロシーベルト」「ナトリウム」など、どこかで聞いたことはあるものの、正しく説明することができないものばかりでした。この研修を通して飯舘村や「フクシマ」について考えるうえで、これらの単語を理解することの重要性に気づくことができ、こういった単語についても理解を深めることができたと思います。

一方、こういった曖昧な認識は、私たちの日常にも広がっているように思います。この研修に参加する前に、フィールドワークで福島第一原子力発電所に見学に行くことを、友人や家族に伝えると、必ずと言っていいほど「大丈夫なの？」という反応が返ってきました。実際に訪れて経験しなければ、そこでどれくらいの放射線を浴び、それがどのくらいの強さなのか、正しく理解することが難しいとひしひしと感じました。実際に福島第一原子力発電所の見学で浴びた放射線量は、長距離のフライト（ニューヨーク～東京間）や胸のレントゲン写真を撮る際に浴びる放射線量と同等程度もしくはそれらより低い数値であることを、見学後に説明を受けました。

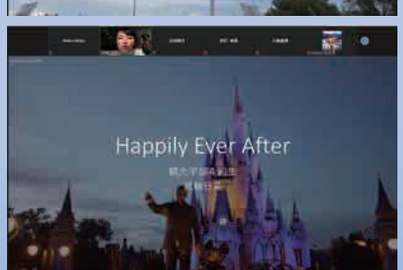
（次ページへつづく）

フクシマに対するネガティブなイメージは、日本のみならず世界中に広がり、風評被害となり、現在もあらゆる方面に影響を与えていると考えられます。今回の研修を通して、それらの風評被害を乗り越えるためには、「実際に訪れる」ことが、いかに効果的で強力なものであるかを実感することができました。それは、必ずしも教育目的である必要はなく、楽しさや癒しを求めた観光目的で訪れることがきっかけとなってもいいのかもしれません。

最後に、例年と異なる形ではありながらも、新型コロナウイルスの感染リスクを最小限にし、この研修を実施する上で尽力していただいたすべての教職員の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

■ TOURISM CAFE「留学経験発表会 001＋002」@Zoom

山本　陽子さん（11 期生／名古屋市立名東高等学校出身）



2020 年 8 月 12 日、18 日と 2 回にわたり、「TOURISM CAFE　観光学部留学経験発表会」がオンラインで開催されました。

TOURISM CAFE とは観光学部の観光実践教育サポートオフィスが提供するカフェタイムで、教職員と学生間で気軽に情報収集を行える場です。今年は新型コロナウイルスの感染拡大を受けてオンラインで実施されおり、今回の発表会は TOURISM CAFE のスピンオフ企画として開催されました。

2 回にわたって、観光学部生 6 名が発表者として登壇し、それぞれの留学経験について発表をしました。私も第 1 回目の発表会で、半年にわたるインドネシアでの経験について発表しました。更には両日の司会進行役も務めました。

発表者は交換留学、私費留学、国費留学、国家プログラム等に参加しており、その留学形態が多様であることに加え、渡航先もアジア圏から北欧、ヨーロッパなど多様な国と地域を選択していたため、ひとりひとり大変個性豊かでバラエティーに富んだ発表となりました。発表プログラムは以下の通りです。

▼留学経験発表会 001 - 8 月 12 日（水）19:00 ～ 20:30
- イギリス私費留学（イギリス・ボーンマス）
- カナダ＆デンマーク、1 年で 2 か国私費留学（カナダ・トロント、デンマーク）
- インドネシアでの日本語教育プログラム（インドネシア・ジャワ州）

▼留学経験発表会 002 - 8 月 18 日（水）19:00 ～ 20:30
- アメリカ交換留学（アメリカ合衆国・マサチューセッツ州）
- メキシコ国費留学（メキシコ・メキシコシティー）
- 米ディズニーワールドでのインターンシッププログラム（アメリカ合衆国・フロリダ州）

今回は企画の一つにチャット機能を利用した質問コーナーを設けました。実際に留学の際に必要となった資金面の話や、留学のための勉強法、また留学中に苦労した点など、具体的な質問も多く、留学への関心の高さが感じられ、大変盛り上がりました。発表と同時進行で質問を受けられたことや、匿名で質問できるために質問をしやすくなったことなど、オンライン開催ならではの利点を活かせたと思います。

私自身、渡航経験について発表する機会を得たことで、改めて自身の経験を振り返る時間を作ることができたと同時に、他の発表者の経験談を聞くことで新たに興味を抱いたことも多々あり、日本に居ながらも海外旅行に出かけたような、そんな気持ちになる楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

今年は新型コロナウイルスの感染拡大によって、ずっと準備を進めてきたにも関わらず、海外留学を断念せざるを得なかった学生も多くいたと聞いています。今回の発表会を機に、少しでも「今できること」を考えたり、留学へのモチベーションの維持に繋げたり、今後の選択肢のひとつとして何か得られるものがあったという感想が届き、大変嬉しく思います。

和歌山大学観光学部には今回の企画のように学生間、学生と教職員間で留学のみならず今後の学生生活や人生プランを考えるきっかけとなる情報交換の場がたくさん用意されています。そのことに感謝しつつ、今後もこの様な取組がさらに発展して、より多くの観光学部生の活躍に繋げられるように願っています。

■ 学輪 IIDA 共通カリキュラム 2020 特別企画「飯田の地域づくりに学ぶオンラインフィールドスタディ」

五味　晴香さん（14 期生／大阪府立岸和田高等学校出身）

毎年 8 月中旬頃に長野県飯田市に赴き行われている南信州・飯田フィールドスタディですが、今年は新型コロナウイルスの流行により、Zoom を利用して「飯田の地域づくりに学ぶオンラインフィールドスタディ」が開催されました。例年より短い 2 日間の日程でしたが、朝から夕方まで飯田市長をはじめとした方々の講演や、参加した大学生とのディスカッションなど非常に密度の濃い時間を過ごすことができました。

オンラインフィールドスタディではまず初めに全体講義として飯田市長から飯田市の取り組みについてお話をしていただき、飯田市について理解を深めました。新型コロナウイルス関連の取り組みについても触れていただき、市長からの問いかけにチャット機能を活用して意見を述べるなど、オンラインならではの意見交換ができました。全体講義の後は「地域自治コース」「着地型観光コース」「地域経済コース」の 3 つに分かれ、それぞれ飯田市で活動されている方々からお話を聞き、他大学の学生と一緒にディスカッションを行いました。私の参加した着地型観光コースでは、初めに南信州観光公社の方から、実際に飯田で行われている着地型観光についてのお話を聞き、続いて飯田で農村ワーキングホリデーと、主に修学旅行生の農家民泊を受け入れている方から受け入れ時に嬉しかったことや大変だったことなどについてお話していただけました。最後の質問コーナーでは、with コロナ、アフターコロナといわれているこれからについて、今はまだ都会から人が訪れるのは怖いといった本音も聞かせていただきました。

最後に、今回このオンラインフィールドスタディに参加して一番良かった点は、様々な立場の人の意見や考えを聞けたことです。どちらかというと着地型観光の訪問者側になる私にとって、受け入れ側の方が着地型観光についてどのようなことを考えているのかということを聞けたのは非常に良い経験となりました。また、他大学で違うことを学んでいる方々とディスカッションを行ったことで、様々な考えに触れることもでき、これから観光について学んでいくにあたって大きく影響を与えてくれた学びの場でした。

今年は実際に飯田に赴くことはできませんでしたが、オンラインならではの良い点もあり、非常に充実したフィールドスタディとなりました。また、飯田の様々な取り組みや観光について内容濃く学べたからこそ、来年以降、実際に飯田でフィールドスタディをすることができれば、是非参加して現地で体験したいと思わせてくれた 2 日間でした。

■ 地域インターンシッププログラム Local Internship Program（LIP）

「農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証」

（岩手県胆江地方および和歌山県）

家口　直己さん（12 期生／大阪府立東住吉高等学校出身）

私たちは、観光学部の地域インターンシッププログラムの一環として農村ワーキングホリデー（以下、農村 WH）に取り組んでいます。農村 WH とは、農家の方々のお宅に泊まり込みで農作業を行い、生活を共にするなかで交流を深めるというもので、同時に日本の農業・農村の現状と課題について考える機会にもなっています。

まず、昨年度までの主な活動内容について紹介します。昨年で活動 13 年目を迎えた和歌山県かつらぎ町は、ぶどうやりんごなどの果樹栽培が盛んな地域です。かつらぎ町では毎年 6 月に生産作業、8 月に観光農園での接客・販売支援、12 月に道普請（地域の道路や用水路などの清掃活動）を行ってきました。また、岩手県胆江地方（奥州市、金ヶ崎町）では毎年 9 月に 1 週間ほど現地に滞在し、稲刈りや野菜の収穫、畜産などの農作業に従事しました。岩手県との関わりは今年で 9 年目を迎え、近年では和歌山大学以外に岩手大学、岩手県立大学、琉球大学からも学生が参加するなど、他大学にも農村 WH の取り組みが広まってきたと感じています。活動前は、知らない土地での生活に期待と緊張が入り混じったような気持ちがありましたが、受入農家の方々は初対面にも関わらず私を家族の一員のように温かく歓迎してくださり、すぐに交流を深めることができました。農村WHの活動を通じて、私たちの生活を支えている「食」の生産現場を体験するとともに、農家の方々の農業・農村への想いも聞かせていただくなど、普段の生活ではなかなかできない貴重な経験をさせていただきました。

（次ページへつづく）

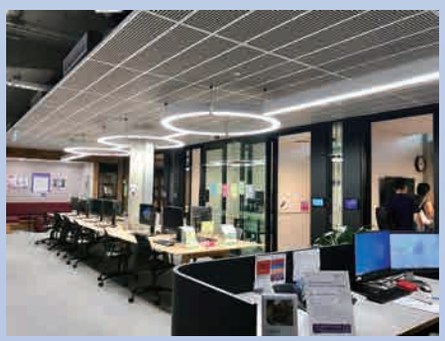
例年は上記のような活動に取り組んできましたが、今年度は新型コロナウイルスの影響によりかつらぎ町と岩手県での活動は見送ることとなりました。しかし、現地に赴くことは叶わずとも地域との関係を継続させたいという思いから、Zoom ミーティングを用いたオンライン学習会を開催することになりました。岩手県の農家の方々 3 名と和歌山大学の教授 1 名に講師となっていただき、農産物の生産から販売に至るまでの仕組みや農業経営、農村での暮らしや地域コミュニティとの関わりなどについてお話をしていただきました。現地で過ごす数日間では深く知ることができなかった経営に関するお話や、農業の 1 年間の流れなどについて伺うことができ、次年度の活動への期待が高まる有意義な学習会となりました。農業・農村への理解が深められる機会になると同時に、以前からこの LIP の課題でもあった「事前学習の充実」に向けて、現地での活動が可能になってからもこのオンライン学習会の取り組みは継続していきたいと考えています。また、徐々にではありますが、感染症対策を講じた上で、従来取り組んできた活動を再開できるようにもなってきました。11 月には和歌山県田辺市上秋津地区でみかん収穫の農村 WH を実施することが決まっています。今年度最初の現地での活動となるため、より積極的に取り組みたいです。

農村 WH を通じて得られる学びは非常に多く、農家の方々の熱意にいつも刺激を受けています。そんな地域の皆様との繋がりを大切にするとともに、今後もより良い LIP を作っていきたいと思っています。

■ Global Intensive Project（GIP）Global Learning Activity
「 INTENSIVE ENGLISH LEARNING ONLINE 」

（ Institute of Continuing & TESOL Education, The University of Queensland, Australia ）

花井　佑果さん（14 期生／大阪府立住吉高等学校出身）



2020 年、世界に与えた新型コロナウイルスの影響は、皆さんもご存じでしょう。今回私が参加したオーストラリア GIP もその影響を受け、オンラインでの開催となりました。この GIP は、オーストラリアにあるクイーンズランド大学付属の語学学校で英語を勉強するというプログラムです。

私は午前 9 時から 11 時までの 2 時間、午前 11 時半から午後 1 時半までの 2 時間、合計 4 時間の授業を 3 週間受けるというコースに参加しました。プログラム前にクラス分けテストを受け、レベル順に 6 つのクラスに分かれます。午前は 17 ～ 18 名生徒がいますが、午後は 7 ～ 8 名ほどの少人数クラスになります。授業は Zoom を使って行われ、Breakout room を頻繁に使用します。そのため、クラスメイトと話す機会が多く、すぐに打ち解けることができるので、授業中の発言や質問が非常にしやすいという特徴があります。授業では Speaking に重点を置いているということで、英語を「学ぶ」というよりも「話す」機会が多くありました。Breakout room ではペアワークが多いので、どの生徒も必ず英語を話す機会があります。積極的に発言することが苦手な生徒でも、スムーズに授業に参加することができると感じました。

また、授業時間外の活動にも参加することが可能です。現地の大学生との会話や、先生に英語についてのアドバイスをもらうことができます。前者は専用のアプリを使って行い、アプリ内でのビデオ通話で会話します。話す相手はクイーンズランド大学の学生で、Conversation club というボランティアの方たちなので話す内容に困ることはありません。また、うまく英語が話せない時はサポートしながら話してくれました。後者はグループでのレクチャー形式と、1 対 1 の 2 種類があります。レクチャー形式のミーティングでは先生一人に対して生徒が 20 人ほどいる中で、英語の勉強方法を教えてもらいます。ここでも Breakout room をよく利用します。このミーティングはレベル分けがされておらず、同じレベルの生徒と受ける授業とは異なり、非常に良い刺激となりました。また、1 対 1 でのミーティングでは先生対自分なので、レクチャー形式よりも個人に合ったアドバイスをしてくださいます。

今回はオンラインでの開催という初の試みだったので、授業についていけるのか、語学力が伸びるのかなど不安に感じる点が多くありました。しかし実際に参加してみると、3 週間だけで消えてしまうものではなく、今後の語学学習方法やコミュニティなど、想像以上のものを得ることができました。これらを今後の勉学に活用していこうと思います。

■ Global Intensive Project（GIP）Global Learning Activity
「Cultural Connections: Touch the world without leaving home」

（ミシガン州立大学連合 日本センター The Japan Center for Michigan Universities）

岡田　真奈さん（13 期生／兵庫県立豊岡高等学校出身）

「オンライン GIP」と聞いて、皆さんどう感じますか。私は、初めて聞いたとき正直つまらなさそうだと感じてしまいました。せっかくの夏休みだから英語の勉強に時間を費やしたい、コロナ禍でも外国を感じたい、と思う一方で日々のオンライン授業でパソコンにうんざりしてしまっていて参加を踏みとどまってしまう部分もあり、参加するかしないか締め切りのギリギリまで迷っていました。結局、「オンライン留学は今年限定でレアな機会なのかもしれない」と珍しいもの好きな性格が出て参加した今回の GIP ですが、私は参加して良かったと思っています。

今年のアメリカ GIP は、9 月 2 日から 11 日にかけてオンラインで行われました。私たちは授業に加え、ゲストレクチャー、現地の学生とのオンライン交流に参加しました。授業は、日本文化を通して作文の書き方を学ぶ my Japan、模擬国連を行う中でディスカッションを学ぶ model united nations、異文化間の違いを見つけ相互間の理解を深める intercultural relations の 3 コマです。話を聞いて、ノートをとって、それに関する課題を進める…という大学の講義のような授業ではなく、トーキングがメインの授業進行でとてもアットホームな雰囲気のクラスでした。ゲストレクチャーでは、ネイティブアメリカンから彼らの文化やアイデンティティについての話を聴きました。ネイティブアメリカンに関してはアメリカ国内でも知られていないことが多いらしく、先生方も興味深そうに聞いておられたのが印象的でした。学生同士での交流では、外国語としての英語を教える勉強をしている学生や日本に興味を持っている学生と日本・アメリカそれぞれの国の文化について話しました。彼らとは GIP を終えた現在でも Zoom での交流を続けています。

私が今回の GIP に参加して得た一番のものは、英語学習へのモチベーションです。1 週間ひたすらに英語を聞き、ネイティブの人たちと沢山お話ししたことで、もっと語彙力を増やして流暢に話せるようになりたいと英語能力に関する欲がふつふつと湧いてきました。そして何より楽しみなのは、コロナウイルスの流行が収まったら、先生や現地の学生と画面を通してではなく、実際に会うことです。特に今回交流した現地の学生の多くは、日本への訪日を予定しています。実際に彼らに会った時にもっと会話を楽しめるよう、これからの勉強に力を入れるという新しい目標ができました。

Topics　－過去のイベントとニュース－

■ 紀の川市 LIP「紀の川スイーツの開発」：新たなコラボスイーツが販売中！
＆試食イベント（学内限定）も開催！

2008 年度より実施している観光学部 地域インターンシッププログラム（LIP）の 1 つとして 2018 年度から紀の川市と実施している「紀の川スイーツの開発プログラム」において、地元店とコラボして開発したスイーツが完成しました。

今回、紀の川市桃山町にある「藤桃庵」とのコラボで生まれたのは、アイスクリーム「キルシュ香るホワイトチョコとバニラ苺」。

和歌山のブランドいちご「まりひめ」を使用し、ホワイトチョコ、バニラとの組み合わせがマッチしたアイスクリームです。キルシュを使用することで、より高級感のある香りを演出しています。

このアイスクリームは現在、和歌山大学生協で 1 個 270 円（税込）で販売しているほか、藤桃庵や白浜町の「とれとれ市場」でも、1 個 350 円（税込）で販売しています。店頭などで見かけましたら、是非、ご賞味ください。

また、10 月 28 日（水）には、学内限定の試食イベントも開催。用意した 150 人分の試食カップは約 30 分でなくなり、大盛況のうちに終了しました。

➔ 関連記事　本誌 2 ページ

➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事　http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2020101400026/

Future Events　－今後のイベント紹介－

■ 中紀バス株式会社との事業連携から生まれたツアープラン販売中！
～「和歌山大学関係者向け 京都バスツアー」

観光学部プロジェクト自主演習の１つである「「和大生 × 中紀バス」旅行商品企画からツーリズム・サプライチェーン・マネジメントを体験的に学ぶ」活動第２弾として、今回は学生だけでなく和歌山大学関係者向けの「低価格で京の町を満喫する」日帰りバスツアーを企画。「学生同士でも良し！　家族やお友達でも良し！　はたまた先生の参加も大歓迎」と銘打っています。

今回は和歌山大学関係者向けのツアーですが、過去には「和歌山大学・観光学部の学生が考えた！琵琶湖の自然を満喫・グランピング体験１泊２日 」（2019 年 10 月）、「和歌山大学観光学部の学生が考えた！伊勢神宮【外宮】【内宮】両参りとおかげ横丁フリータイム 」（2019 年 12 月）、「【じゃばらの里・筏下りの北山村】日本唯一の飛び地の村「北山村」で大迫力の筏下りで大自然を満喫・癒し旅」（2020 年 8 月、9 月）などの多彩なツアープランを企画し、販売されています。

中紀バスの感染予防対策（http://www.chukibus-group.co.jp/index.html）を知り、当たり前と思われている安全・安心への日頃の取り組みの重要性を改めて実感する良い機会にもなっています。引き続き、安全・安心に配慮した旅行商品を、学生の感覚を取り入れて、企画していきます。

➔ 関連記事　本誌２～３ページ
➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事　http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2020111200012/

■「2020 年度 和歌山大学『観光・地域づくり』講座 @Zoom」のご案内

本講座は、観光地や観光ビジネスにおいて高く評価されているキーパーソンを講師に招へいします。各方面で活躍されている方々のユニークな着眼点やリーダーシップを発揮しての事業の推進、異業種を巻き込んでのコンセンサスの形成方法など、さまざまな観点からの実践事例を拝聴するなかで、和歌山県をはじめとする地域の観光振興とまちづくりの方向性を探ります。

なお、本講座は 2008 年度から昨年度まで開講してまいりました「観光カリスマ講座」を受け継ぎ、本年度より「和歌山大学『観光・地域づくり』講座」として開講しています。また、本講座は 観光庁「中核人材育成講座」公認プログラムです。

2020 年度は、Zoom のウェビナー機能を利用したオンライン公開講座（ライブ配信）となっており、既に第 1 回～第 4 回は終了していますが、最終回となる第 5 回は 12 月 3 日（木）に行われます。森重良太 氏（株式会社南紀白浜エアポート 誘客・地域活性化室 室長）を講師にお招きし、「空港型地方創生～民営化空港による地域経済の活性化～」と題して開催されます。参加申込は現在も受付中です。皆さまの聴講をお待ちしております。

➔ プログラムや参加申込方法などは、観光学部 HP 掲載ニュース記事をご覧ください。
http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2020091500010/

編集・発行　（2020 年 11 月発行）
和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス
〒640-8510　和歌山市栄谷 930　和歌山大学西 4 号館 K216 室、K116 室
TEL　073-457-8553　／　E-mail　tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp　／　URL　http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/